

聖書：マルコの福音書 8：1～21

説教題：まだ悟らないのですか

日時：2025 年 11 月 16 日（朝拝）

今日の箇所最初には、いわゆる四千人の給食が記されています。少し前の 6 章 30～44 節には五千人の給食の記事がありました。似たような出来事が再びここで起こります。今回の舞台はどこだったのでしょうか。前回の 7 章 31 節に、イエス様はデカポリス地方を通してガリラヤ湖に来られた、すなわちデカポリスに接するガリラヤ湖の辺りに来られたと記されていました。そこは異邦人が多く住む地域でしたが、ユダヤ人も相当数住んでいたと前回述べました。今回の出来事もその周辺で起こったと思われる。イエス様の周りには大勢の群衆が集まっていた。果たして彼らはユダヤ人だったのか、異邦人だったのか、聖書にははっきり書いていません。おそらくこの地域を反映するように、異邦人とユダヤ人の両方が混在していたのではないのでしょうか。そしてもし異邦人が含まれていたなら、この出来事にさらに大きな意味が加わることになります。

さて、この大勢の群衆は食べる物が無い状態にありました。イエス様は彼らが三日間、ご自身とともにいると言っています。これは群衆が最初から三日間、何も食べていなかったというよりは、イエス様と一緒にいる内に、三日目には食べ物がみな尽きていたということなのでしょう。それでも彼らはイエス様に従い続けていました。それほどイエス様に引き付けられ、イエス様を求めていた彼らでした。イエス様は彼らを見て「かわいそうに」と思われました。人々の必要を見て、憐れみの心を持たれるイエス様のお姿がここにもあります。そこで弟子たちに語りかけられました。すると弟子たちは 4 節で「こんな人里離れたところで、どこからパンを手に入れて、この人たちに十分食べさせることができるでしょう」と答えます。少し前に同じような経験をした彼らなのですから、もう少し別の応答があっても良さそうですが、これは後に明らかにされる通り、彼らの霊的な鈍さの現れなのでしょう。イエス様は「パンはいくつありますか」とお尋ねになり、弟子たちは「七つあります」と答えます。すると、イエスは群衆に地面に座らせ、七つのパンを取り、感謝の祈りをささげて裂き、それを配るように弟子たちに与えられました。前回と同じです。小魚も同じように分けられました。こうして群衆は食べて満腹しました。そして余りのパン切れを取り集めると、七つのかごになりました。この出来事は五千人の給食と同様、荒野でマナをもってイスラエルを養ったモーセを彷彿とさせるものです。あのモーセが指し示す、神が遣わしたもうまことの救い主がイエス様であるということです。またこれは五千人の給食の時にも述べたように「終末的なメシアの祝宴」を指し示す出来事でもあります。神はやがての日に、最終的な天の御国で、ご自身の民を招いて、豊かに食べさせ、養ってくださることが旧約で預言されていました。このメシアによる終末的な祝宴の先取り、その前味がここにあったのです。ここに異邦人も混じっていたとするなら、この祝宴には全世界の人々が招かれるということが、すでに前触れとしてここに示されていたことになります。その後、イエス様は群衆を解散させ、ダルマヌタ地方、ガリラヤ湖の西側へ渡って行かれました。

さてそこで今日の2つ目の記事が記されます。パリサイ人たちがやって来てイエス様と議論を始めます。彼らはこれまでも挑戦的で敵対的な態度を取って来ましたが、ここでもそうです。彼らは「天からのしるし」を求めました。私たちは四千人の給食が記された直後なのに、さらに奇跡を求めるとはどういうことかと一瞬不思議に思うかもしれません。この「しるし」という言葉には印が付いていて、欄外を見ると、あるいは「証拠としての奇跡」と書かれています。つまりこれは特別な種類の奇跡を意味しています。イエス様が神から遣わされた者であることを誰も否定できない形で示す「決定的な証拠」のことです。議論の余地なく、イエス様をメシアだと認めざるを得ない明白なしるしです。それを要求して来ました。私たちはこれをどう思うでしょうか。そう言われるなら、やって見せれば良いのでは？と思うかもしれません。そうして二度と彼らがこんな口をきけないようにしてやれば良いのではないかと。しかしそれでは信仰にはならないのです。認めざるを得ない状況に追い込まれて「認めます」と言うのは信仰ではありません。ですから「証拠を見せよ！そうしたら信じる」という態度は信仰とは別の道を行くことです。「見たら信じる」という主張は心にある疑いを覆い隠した言葉に過ぎず、それは信仰の道ではないのです。

イエス様は、決してそのようなしるしは与えられないと答えます。イエス様は他の箇所でも、人々の要求に応じて「証拠としての奇跡」を行ったことはありませんでした。ご自分の偉大さを誇示し、ショーのように力を見せつけることは神の思いに反します。イエス様が神の力を使われたのは、あくまで弱さの中で助けを必要としている人々へのあわれみのわざにおいてでした。人々の賞賛や承認を得るために奇跡を行われたことは一度もないのです。それに仮に要求に応じて奇跡を行ったとしても、「信じない」という姿勢を固めている人は結局信じません。以前、律法学者たちはイエス様の働きを見て「悪霊の力によるものだ」と非難しました。そういう心にどれほどしるしを示しても意味がありません。イエス様は「心の中で深くため息をついた」と書かれています。そこには深い嘆き、そして憤りも含まれていたでしょう。イエス様は彼らから離れ、再び舟に乗って向こう岸へ向かわれました。

そして今日取り上げる三つ目の場面となる14節以降につながります。弟子たちは急いで舟に乗ったためか、パンの用意を忘れ、舟の中には一つのパンしかありませんでした。この状況を用いてイエス様は大切なことを弟子たちに教えようとされました。15節：「そのとき、イエスは彼らに命じられた。『パリサイ人のパン種とヘロデのパン種には、くれぐれも気をつけなさい。』」パン種はパンの生地の中に浸透して全体を膨らませるものです。それはごく小さいものですが、全体に大きな影響を及ぼします。聖書では多くの場合、悪い影響を象徴する言葉として用いられています。さてこのパリサイ人とヘロデのパン種とは何でしょうか。パリサイ人のパン種と聞くと、私たちは偽善とかイエス様への反対といったことを思い浮かべます。一方、ヘロデと言えは何でしょうか。すぐ思い起されるのはバプテスマのヨハネの首をはね、結局迫害したことです。結論から言うならば、このパリサイ人とヘロデに共通しているパン種とは、一言で「不信仰」になるかと思います。ヘロデはヨハネが語る神のことばを内心喜ん

で聞いていましたが、信仰の道へ踏み出すことをせず、決断を先延ばしにし続け、ついには迫害する側に回りました。つまり不信仰です。パリサイ人も同じです。彼らはまさに信じようとしなないスタンスでイエス様に議論を仕掛けて来ました。その根にあるのはやはり不信仰です。ですからイエス様は両者に見られるこの「不信仰」にくれぐれも注意せよと言われたと考えられます。

これを聞いて弟子たちはどうだったでしょう。16 節に「すると弟子たちは、自分たちがパンを持っていないことについて、互いに議論し始めた」とあります。彼らは、イエス様がパンを持って来なかったことを間接的に責めておられるのだと受け取りました。そして互いに議論をし始めました。これは誰が悪かったのかというような議論を始めたということでしょう。ここに全く的外れで、無理解な弟子たちの姿が描かれています。

それに気づいてイエス様は言われました。「なぜ、パンを持っていないことについて議論しているのですか。まだ分からないのですか、悟らないのですか。心を頑なにしているのですか。」 さらに続けて「目があっても見ないのですか。耳があっても聞かないのですか。」 これは 4 章 12 節では不信者の状態を指す言葉として使われていたものです。その言葉がここでは弟子たちに向けられています。つまりイエス様から「不信仰に気をつけなさい」と警告されているただ中で、弟子たち自身が不信仰に陥っていたということです。まさに警告されたパン種に彼ら自身がすでに侵されていたのです。

では本来弟子たちはどうあるべきだったのでしょうか。それは不信仰とは反対に、イエス様への信仰に生きることです。彼らはこれまでイエス様のそばで生活し、イエス様とともにあることがどれほどの祝福をもたらすのか、経験を通して学んで来ました。そのイエス様がこの時も彼らとともにおられるのです。ですから、どんな問題に直面しても、まずともにおられるイエス様を見上げ、その信仰に立って考え、取り組むべきでした。しかしこの時の彼らの心を占めていたのは「パンが足りない」ということだけでした。足りない。一つしかない。生活の不安に直面して、「これがない」「あれがない」という欠けにばかり思いが向かっています。物質的なこと、世俗的なこと、この世の事柄に心を奪われ、主を見上げる信仰に生きていない。そしてその不安を解消するためでしょう。互いに議論を始め、あなたが悪い、いやあの人が悪い、と他人を責め、自分の心を落ち着かせようとしている。

そんな弟子たちに主は問われました。「あなたがたは、覚えていないのですか。わたしが五千人のために五つのパンを裂いたとき、パン切れを集めて、いくつのかごがいっぱいになりましたか。」彼らは答えました。「十二です。」 また「四千人のために七つのパンを裂いたときは、パン切れを集めて、いくつのかごがいっぱいになりましたか。」彼らは答えました。「七つです。」 そしてイエス様は言われました。「まだ悟らないのですか。」弟子たちは事実そのものは覚えていました。しかし、過去に学んだこと、経験したことを、目の前の出来事に適用できていません。信仰に立たず、むしろ

不信仰に立って「足りない、足りない、どうしよう、どうにもできない？」などと考え、人間的な議論ばかりしていたのです。

しかし、ここには希望もあります。それは「まだ悟らないのですか」というイエス様の言葉の中の「まだ」という一語です。この「まだ」には悟るのに遅いという叱責の意味も入っているとは思いますが、しかしそれで不合格と決めてしまうなら、この時点で弟子たちを見捨てても良いはずでした。「ここまで導いても理解しないのなら、もう終わりだ」と言っても良いはずでした。けれどもイエス様はそうなさいません。「まだ悟らないのですか」という言葉には、「今は悟っていないが、やがて悟る時が来る」という含みもあります。イエス様はその日を期待し、忍耐をもってなお彼らを導かれるのです。実際、この後、悟り始める時が彼らに訪れます。次回見る 29 節でペテロは立派な信仰告白をします。もちろん、それもまだ不完全であることが明らかにされますが、それでも悟りが始まる時が来るのです。主のお導きゆえに、そうした時が与えられるのです。そのような希望の光もここに示されています。

さて、私たちは今日の御言葉をどのように受け止めるでしょうか。「まだ悟らないのですか」というイエス様のお言葉を、自分に語られている主の言葉として聞き、自らの心を探る必要があるのではないかと思います。私たちもまたパンが一つしかないような不足の状況、生活の不安、あるいは主の摂理を信じているはずなのに、その摂理にどこか不満を感じるような場面にしばしば直面します。その中で、イエス様を見上げず、世俗的な心配で心が一杯になってしまうことはないでしょうか。どうしよう、どうしようと考えるばかりで、そこに信仰が欠落していることはないでしょうか。私たちは聖書を通して、イエス様こそ私の救い主であり、すべての上に立つ主権者であり、最善に導いてくださる方であると知っています。そして、そのイエス様は聖書の中に閉じ込められた方ではなく、私たちの現実の人生の中で、恵みをもって導いてくださったことを幾度となく味わって来たはずです。にもかかわらず、新しい状況に直面すると、その学びを生かせず、ともにおられるイエス様を見失い、人間的な心配ばかりに終始してしまう。そしてその不安を紛らわすために、人を非難し、誰かを悪者にして、自分の心を落ち着かせようとする。それはまさに「不信仰」のパン種に侵されている姿ではないでしょうか。気づかない内に、そのパン種が心の奥深くにまで入り、思いと行動のすべてを支配してしまっていることはないでしょうか。「パリサイ人とヘロデのパン種にくれぐれも気をつけなさい」という言葉は、まさに今日の私の歩みにも必要な言葉ではないでしょうか。

イエス様が不信仰に注意せよ！と言われたということは、裏を返せば主に信頼する歩みへ招いておられるということです。たとえどんな困難に直面しても、主がそこにもともにおられます。主は何もない寂しいところで五千人を満腹にされたお方です。また今日の箇所を見た通り、辺ぴな場所で四千人もの大群衆を満ち足らせたお方です。その方はどんな状況でも私たちとともにいてくださり、そこをメシアの祝宴の前触れとなる場所へと変え得るお方です。私たちも今日の箇所の弟子たちと同じく、足りない者かもしれません。「まだ悟らないのですか」と主は問いかけておられるかもしれま

せん。しかし主はそう問いかけつつ、私たちの成長を期待しておられます。不信仰のパン種にくれぐれも注意し、主がともにいてくださることを、いつでも、どんな時も第一に見上げて、主に信頼する歩みへ進む者でありたいと思います。そしてこれまでと同様、これからも、主の奇しい守りと恵みを深く味わわせていただき、主をお喜ばせする歩み、主の栄光を現す歩みへと進む者でありたいと思います。